

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

地域文化財活用の可能性について

— 事例報告 —

鈴木 康 二

はじめに

近年、各地方自治体や教育委員会等において、「地域の文化財」としての埋蔵文化財の見直しが始まっている。これは、取りも直さず「地方分権」による行革の一環でもあり、埋蔵文化財行政の今後を考える上で、避けては通れない問題であろう。「埋蔵文化財とその情報の普及」について、根幹から見直す時期に来ていることは想像に難くない。

そもそも「埋蔵文化財」は、『文化財保護法』によって、「国民共有の財産」として示され、かつ「保護すべき対象」としても明示されている。そして我々は、日々埋蔵文化財の発掘調査・研究をし、そこから「歴史像」あるいは「文化像」を抽出することに尽力もしている。しかし、ではそれらの「歴史像」なり「文化像」を、実際に一般の方々に「見せる」努力を、具体的にどれだけしているのだろうか。

「普及」関連の活動として、現状で目に留まるものをいくつか挙げてみよう。例えば「普及啓蒙書」と呼ばれる、一般向けの概説書の刊行・出版⁽¹⁾がある。あるいは九州の吉野ヶ里遺跡や青森の三内丸山遺跡のような、「遺跡を保存・整備し公開」する場合もある。最近の考古学ブームに後押しされて、あるいは考古学ブームを産み出すきっかけとして、これらは十二分に機能していると言えよう。

もう少し身近な所で例を挙げれば、「現地説明会」や「新聞記事」のような、調査成果・内容の紹介がある。あるいは博物館や資料館での「展覧会」等もそうであろう。さらに最近、博物館等の公開施設において、各種「イベント」—例えば子供考古学教室・火起こし体験・勾玉作り・一日学芸員など—を催して、普及に努める工夫もされている。また、「出前考古学教室」のように、こちらから出張イベントを実施する場合もある。

「こうしてみると、結構いろいろやってるんだね。」という声が聞こえてきそうである。確かにそうだと

思う。ただ、ひとつ言えるのは、これまで行なわれてきた普及活動の大半は、あくまで我々埋蔵文化財行政側の人間が主体であり、いわゆる一般の方々に参加していただく「参加型」と呼ばれる形態をとっているということである。しかし本来、例えば「地域に根ざした文化財」を謳うのであれば、「イベント」の主体者は一般の方々であるのが理想的ではなからうか。だとすると、少なくとも今以上にもっと「日常生活」の中に「文化財」が取り込まれることが必要に思える。しかもそれはその個人の「身近なもの」として、である。

ではどうすれば、それが可能になるのであろうか。例えば、「学校教育」の場において、「いつもと同じ先生(例えば担任の先生)」が他の授業をするのと同様に、「文化財」の説明をし「文化財に触る」時間を設けてみる、というのはどうであろうか。

1. 文化財活用実践までの経緯

平成10・11年度に、滋賀県教育委員会(文化財保護課)を事業主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を研修機関として『地域文化財活用開発事業』を実施した⁽²⁾。この事業に参加、報告書に授業(単元)構想を執筆して下さった大津市立富士見小学校の伊藤真治教諭から、今年度(平成12年度)、富士見小学校6年2組の児童を対象にその授業構想の実践を行なうので、協力して欲しいという依頼を受けた。そこで、授業内容や提示資料等の検討を行なった上で、文化財活用の実践を行なった。

なお、基本的には伊藤教諭が授業を進行し、鈴木が補助する⁽³⁾という授業形態をとった。また、使用した教材(遺物やスライド)の解説等については、伊藤教諭の指示(「鈴木さんに聞いてみよう。)」のもと、必要に応じて適宜鈴木が行なった。授業は原則として1時限が45分間、5月10日は1・2・4校時目、5月24日は3・4校時目の社会科の時間を実践の時間に当てた。また、5月24日分の授業実践について

は、「研究授業」という形態をとり、6年生の先生方のみならず他学年の先生方も授業を見学している。

2. 5月10日の実践

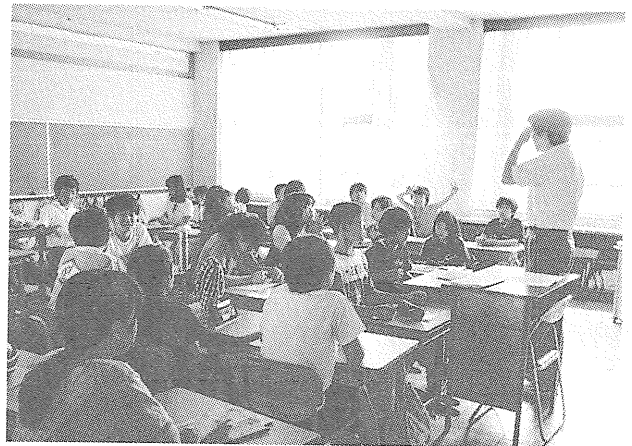
使用教材

- 粟津湖底遺跡(第3貝塚)現地調査時のカラーライド(13枚)
- 粟津湖底遺跡(第3貝塚)出土のイノシシ下顎骨(2点)、スッポン頭骨(2点)および甲羅破片(3点)、コイ咽頭骨(左右1対)、セタシジミ貝殻(34個:児童及び教員の人数分)
- 現生標本:スッポン頭骨および甲羅、コイ咽頭骨および胸ヒレ
- 石器:石鏃(6点)、石匙(3点)、石錘(3点)

授業内容

1校時目は視聴覚教室で、粟津第3貝塚現地調査時のカラーライドを用いて、遺跡の概要等についての説明を行なった(下写真)。児童からの質問を受け、それに答えながら、「貝塚」を構成する「大量の白いもの(=貝)」の存在について考えさせていった。ライドは航空写真等の遠景から、貝層の近接写真へと順次移行し、獣骨、骨角器、土器等の出土状況、人骨(頭蓋骨)の出土状況と復元された人骨の計13枚を提示した。併せて伊藤教諭からは、粟津湖底遺跡(第3貝塚)が約5,000年前にできたもので、今は湖の底に沈んでいることについて大まかな説明があった。児童からは、土器や骨などの出土遺物についても、様々な疑問・意見が述べられた。

2校時目は6年2組の教室へ戻って、「大量の白



いもの(=貝)」が貝であることを児童全員で確認しつつ、教材として用意した第3貝塚から出土した貝殻(セタシジミ)を各自に配布し、その観察を各自が行なった。なお、貝殻の取り扱い等については、鈴木が簡単に説明した。

貝殻はビニール袋に1点ずつ収納されているため、まず各自で袋から取り出す必要があるのであるが、その際に「注意深く観察させる」、さらに「丁寧に扱う」事に気づかせるために、以下のような会話を児童と交した。

鈴木:「貝殻を袋から出す時に、指に白い粉のついた人はいますか?」

(クラスの2/3が挙手:皆少し得意げな表情)

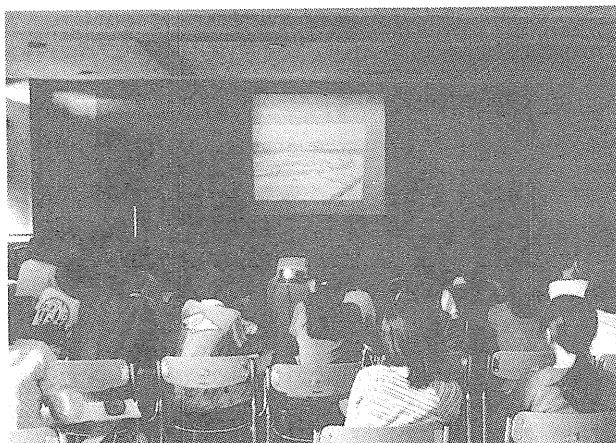
鈴木:「その粉は、貝殻が少しずつ壊れている証拠なんですよ。」

児童:「…!」

鈴木:「だから大事に触ろうね。」

児童は各自ノートに貝をスケッチし、物差し等を使って大きさを測ったり、観察して気づいたことをスケッチに書き込んだりしていった。その後、気づいたこと等の意見・疑問を出しあった。貝の種類・名前は何なのか?等の疑問について、社会科の教科書や資料集、参考教材等を見ながら、「調べ学習」の実践を行なった。児童からの質問については、あくまで児童自身に「考えさせる」ことを念頭に、適宜答えていった。

そして、伊藤教諭の指示で、殻の名前を含めて、観察したことを発表しあった。「表面に穴があいている」「表面が縞々になっている」「内面は外面よりもツルツル」などなど。先生は、その中から「貝の表



面には抉り開けた痕が無い」ことに気づかせ、「どうやって貝を開けたのか？」それから「中身は食べたのか？」を児童に考えさせた。児童から、「煮た」「焼いた」そして「もちろん食べた」等の意見が出た。

4校時目は、「当時の人々は何を食べていたのか？」という先生の問いから始まった。児童からは「貝、イノシシ・シカ・魚…」など様々な意見が出た。それを受けて「じゃあ主食は？」という先生の問いに、児童は「…」、先生「今の僕たちは？」、児童「お米！」、先生「じゃあ縄文時代は？」、児童「…クリ、魚、けもの…」。

先生は「その食べ物はどんな風に食べたのかな？食べ物の調理方法は？どんな道具を使っていたのかな？」と問いかけた。児童「土器・石器…」。

ここで、教材として用意した石器を提示し、児童は各自で貝殻と同様の方法でスケッチや観察をしながら「どんな作業に、どのように使った道具なのか」を考えた。ここでも、必要に応じて資料集等参考教材も併用した。

その後、食べていたものやその様子等を、先生の指示により、用意した教材を説明とともに提示しつつ、鈴木が補足説明した。例えば、イノシシは成獣と幼獣の下顎骨を提示し、それぞれを「丁寧に観察すること」で違いに気づかせた。

鈴木：「この2つ(イノシシ下顎骨2点：次頁写真)は何が違うのかな？」

児童：「大きさ！」

鈴木：「そうですね。ではなぜ大きさが違うの？」

児童：「オスとメス。」「…子供と大人。」

ここで、児童に2点の「歯(第3大臼歯)」の状態を観察させ、その萌出状態を比較させた。その状況から、この2点は「大人と子供」のものなので大きさが違う、ということの説明をした。

他にも、スッポン・コイは現生標本と遺物とを提示し、大きさの違いを指摘し、その上で「その背景はなんだろう？」と問いかけた。常に児童自身に「観察させる」「比べさせる」ことと「違いを見つけ出させる」ことを念頭におきながら説明を加えた。

栗津湖底遺跡

縄文時代 5000年前の人間の生活のあと

琵琶湖総合開発で掘られるのを少しでも文化財として活用しようと考えた

い。ぱいあった白い貝

3.2cm

3.4cm

すじは大体三十本ぐらい

たていもひびみたいたのかある。

外側から見た図

下の方にあなみたのがある

横にすじがある。

筋力があるらしい。

内側から見た図

セカシジミ

思ったこと

まんが貝が5千年も前の貝がなんでこんな新しいようなのびつくりした。

5千年もたってまだ人に形が残っているなんて貝はすごい

貝塚

どうやって食べたの？

凸凹

凸凹

凸凹

凸凹

疑問

何でこんな小さいのを作ったの？

でかいのを作ればよかったのに。

食べていた物

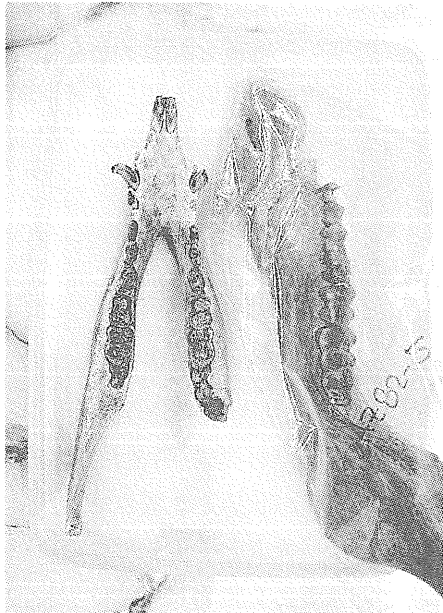
イノシシかスッポンアユコイフナ

一番食べていた物は肉魚貝

気づいたこと

昔の生き物は今に比べて大きいのが多い。

図1 授業ノート (児童作成：5月10日分)



その後先生からの指示により、児童は各自気づいたこと、疑問点などをノートに記入し、5月10日の授業は終了した。

なお午後からは、校長室において校長先生および

6年生の担任の先生方に、今回の授業で用いた教材について、解説を加えた。その際に先生方から出された質問等は以下の通りである。

- この骨は何の骨か？
- 白い骨(=現生標本)と茶色い骨(=出土遺物)の色の違いは？
- なぜセタジミの貝殻がこんなに大きいのか？
- 貝殻や動物の骨が、腐っていないのはなぜ？
- どんな遺跡でも貝殻や骨は出土するのか？
- 石器はどうやって作るのか？
- なぜ、わざわざこんな小さなもの(=石鏃など)を作ったのか？
- 石器材料はどこからどう入手したのか？

その後、児童の感想文⁽⁴⁾を読みつつ、伊藤教諭にお話を伺ったところ、児童の目の前に「実物」があるのと無いのとでは、児童の集中力が全然違うという指摘があった。そこに、社会科あるいは歴史の授業に、埋蔵文化財を教材として活用する意義は充分に

<p>5月10日(水) 今日、学校に鈴木先生が来て、5000年前の貝殻を見せてくれた。5000年前の貝殻は、今よりも大きかった。鈴木先生は、貝殻の大きさを比べてくれた。他にもいろいろ見せてくれた。</p>	<p>5月10日 水 5000年まえの貝なんてすごい!! スゴすぎた。宝物になったよ。うれし。</p>	<p>今日、ひまきで、いろいろな貝殻と比べてみた。いろいろなこととお話を聞いた。おもしろい。か。</p>	<p>5月10日(水) 今日、学校に鈴木先生が来て、5000年前の貝殻を見せてくれた。5000年前の貝殻は、今よりも大きかった。鈴木先生は、貝殻の大きさを比べてくれた。他にもいろいろ見せてくれた。</p>
<p>5月10日 今日、鈴木先生が来て、5000年前の貝殻を見せてくれた。5000年前の貝殻は、今よりも大きかった。鈴木先生は、貝殻の大きさを比べてくれた。他にもいろいろ見せてくれた。</p>	<p>5月10日 今日、鈴木先生が来て、5000年前の貝殻を見せてくれた。5000年前の貝殻は、今よりも大きかった。鈴木先生は、貝殻の大きさを比べてくれた。他にもいろいろ見せてくれた。</p>	<p>5月10日(水) 今日の社会は、鈴木先生も来てくれて、いろいろな話を教えてくれた。おもしろい。化石のじつ物も見せてくれた。おもしろい。</p>	<p>今日は、歴史にいろいろと話を聞いた。5000年前の貝殻は、今よりも大きかった。鈴木先生は、貝殻の大きさを比べてくれた。他にもいろいろ見せてくれた。</p>

図2 一言ノート (児童作成：5月10日分)

あろう。また、歴史研究の主眼のひとつでもある「過去を振り返り、その成果を未来に照射する」ということにおいても、前述の実践記録の通り、充分にその役割を果たせることを、この日の実践を通じておぼろげながら再確認した。

3. 5月24日の実践

使用教材

○ 粟津湖底遺跡(第3貝塚)出土の縄文土器

復元個体：2個体、破片資料：12点

補修繊維及び炭化物付着破片：1点

○ 縄文原体標本等

6年公開授業参観(研究授業)

この5月24日分の実践は、「研究授業」という形態を取り、6年生の先生方のみならず他学年の先生方も授業を見学している。

3校時目はまず、伊藤教諭持参の土鍋と縄文土器(下左写真)を教室の中央に並べて提示することから始まった。ちなみに、児童は前日の宿題で、家にある「器」の観察をしており、ある程度「観察項目」については整理できていたようである。

先生は「この土器は、何に使った土器でしょうか?」と、児童に問いかけながら、土器の大きさや形、厚さ、模様、底(安定しているか)、重さ、色、等を観察させた。児童は各自、ノートにスケッチ、メモを記入していった。

先生：「気づいたことを発表して下さい。」

児童：「直径31.5cm、高さが30.5cm。」

「下端の方はツルツルしているところがあ

る。」

「底が無い。」

「土器の上の方と下のほうでは、ついている模様が違う。」

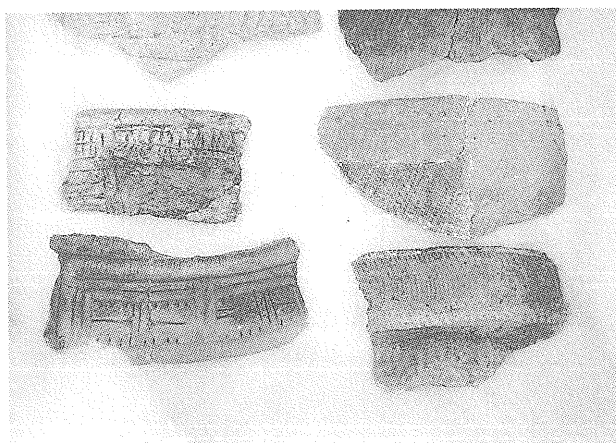
「“指紋”がついていない。」

「土器の表には模様があるけど、中にはない。」…

その後、先生の指示で鈴木が「ツルツルしているところ」は石膏で復元した部分であるということ、「底」は土の中から掘り出された時点で既に無かったこと、でもこれまでの研究成果を考えると、もともとあった可能性が高いこと、「指紋がついていない」のは器面を平滑にするために撫で消したりすることがある、等について補足説明を行なった。

続いて、各班に分かれて2点ずつ土器片を配り、同じように観察させた。ただし、今度は破片資料なので、観察途中で「土器片の上・下はそれぞれどちらでしょう?」という発問もしている。土器は縄文地に爪形や円形の刺突を施したものと、沈線等を多用するものを各1点ずつ、それぞれの班に提示した(下右写真)。大きさ、形、模様、厚さ等を各自観察し、ノートにスケッチ・メモを記入していった。先ほどと同様、気づいた点を児童に発表させる。

2点の模様の違いや厚さの違い等についての指摘はもちろん、中には色の違う土器片が接合されていることを指摘した児童や、破片の上下だけでなく「こういう土器のこの辺!」と、最初に提示した復元した土器と比較して意見を述べる児童、また「どちらの土器もすごく丁寧に模様をつけている。」と感心する児童もいた。その後、破片の上下の見分



け方や色の違う土器が接合される状況等について、若干の補足説明を鈴木が行なった。また、「模様の違い」についても触れ、「この模様は何のためにつけられたのかな？」という発問を最後に3校時目を終了した。

4校時目は、先生の問いかけ「土器の模様について考えてみよう」からスタートした。どんな道具を使うのか、どんな風につけるのか、等々を考えながら、縄文原体を児童に配布し、油粘土に土器の縄文と同じような模様をつけるためにはどうしたらいいのかを考えさせた。そのまま押し付ける児童もいれば、早速転がす児童、原体の先端を使って刺突する児童もいた。右から左へ転がした後上から下へ重ねて転がす児童もいれば、原体の太さが違うから土器についているものとそっくりにならないと指摘する児童もいた。児童の発問が、縄文以外の模様についてのものに移行した時点で、他の原体(右写真：半截竹管など)も配布、自由に模様をつけさせる。結論として、縄文は「ねじったひも」をまっすぐ転が



すことで、爪形等は竹や貝殻等を使ってつけたのだろうという意見になった。先生の指示で、児童は気づいたこと、感じたことを各自メモしつつ、4校時目が終了した。

4. 資料説明

(即席 改訂版「出前考古学教室」)

この日(5月24日)、お昼休みの時間を利用して、6年2組以外のクラスの児童達が「土器を見た

栗津湖底遺跡 貝塚から出た縄文土器

気づいた事

- ★ 小さな穴があいている。
- ★ いろんな所にひびがある。
- ★ 外がわにもようがついている。
- ★ 外がわはざらざら。
- ★ そこがねい。

★ 大きさ
★ 形
★ 厚さ
★ もよう
★ その他

★ 大きさ → 土ねべの3倍ぐらい 横31.5cm 縦30.5
★ 形 → 上の方から大きくなって小さくなってまた大きくなる
★ 厚さ → 上の方は厚くて下の方はけ-マウすい
★ もよう → たて線と横せんはなめの線がついている
★ 色 → 全体的に茶色っぽい

なぜようをつけたの?
どのようにつけたの?

上からまたは下から
ひもをころがす。

まがマがすとかなめになる。
★ ひもがねじれているから
まがめするとまがぐにたろ

白い石マウす直す。

5000年前

スケッチ

おもて ①

うら ②

報告書
R-010
R-011
R-012
R-013
R-014
R-015
R-016
R-017
R-018
R-019
R-020
R-021
R-022
R-023
R-024
R-025
R-026
R-027
R-028
R-029
R-030
R-031
R-032
R-033
R-034
R-035
R-036
R-037
R-038
R-039
R-040
R-041
R-042
R-043
R-044
R-045
R-046
R-047
R-048
R-049
R-050
R-051
R-052
R-053
R-054
R-055
R-056
R-057
R-058
R-059
R-060
R-061
R-062
R-063
R-064
R-065
R-066
R-067
R-068
R-069
R-070
R-071
R-072
R-073
R-074
R-075
R-076
R-077
R-078
R-079
R-080
R-081
R-082
R-083
R-084
R-085
R-086
R-087
R-088
R-089
R-090
R-091
R-092
R-093
R-094
R-095
R-096
R-097
R-098
R-099
R-100

①
★ おもての形はふくぶつ
★ たて線のもようは、かり
★ うらは一番上だけたて線のもようがある。
★ しらせいのあとがはまりとわかる
★ 上にしかもようがない

図3 授業ノート(児童作成: 5月24日分)

い。」と集まってきた。基本的にはほとんどの児童が6年生である。伊藤教諭と相談して、空いている教室をお借りして、即席「出前考古学教室」を行なうことになった。ただし、従来の「出前考古学教室」のようにこちらから解説をしてしまうのではなく、授業の時と同様、あくまで児童から発せられた質問に鈴木が答えていくという形をとった。

「これは何?」「何年前のものなの?」「この土器はどこにあったの?」「湖の底」って、誰かがもぐって見つけたの?」「遺跡」ってどんな所にあるの?」「地面から深さどれくらいの所で出てくるの?」「もしお家の庭とかで見つけたらどうするの?」…。いろんな質問が飛び交う。

「もし拾ったら…」という質問に対して、「やっぱり「警察」とどけるのかな?」と他の児童。するとまた別の児童「拾った“お金”とかなら、持ち主が見つからなかったらもらえるよね?」「じゃあ、土器ももらえるのかな?」「だって落とし主って…?」「どうするんだろう?」…。

鈴木：「そういう場合にはこうなさい、ってい

う“法律”が決められているんだよ。」

児童：「ふーん。」「じゃあ守らないと逮捕されるの?」

…残念ながら、ここで次のクラブの時間になってしまったため、答えは途中になってしまった。児童たちの関心が、大人顔負けの部分にまで及ぶことを実感したのと同時に、こういうことを説明する時間の必要性を改めて痛感した。

その後、今度は校長室で、教室での勉強に参加していない児童(3年生)が、土器に興味を示して覗き込んできた。第2弾「出前考古学教室」のスタートである。「これは何?」「今日持って来はったん?」「何で学校に持ってきたの?」「この土器の研究してはるの?」…。興味津々である。

鈴木：「持ってみる?」

児童：「落とすといけないから…。」

鈴木：「大丈夫、支えてあげるから持ってください。」

児童：「…(恐る恐る持つ)…!!」

鈴木：「どう?重い?」

5月24日(水)
今日、3・4時間目に「社会」
をした。さぶ木さんが来てく
れて、土器のやげらを見た
りした。そしてヒモ一本だ
けでもさうかてできること
が分かった。私はさぶ木
と思った。

5/24 今日はずきさんが来た。じょう
文土器を見せてくれた。めら
うれしかった。かなりすごかった。
たぶん一度しかみれないと思っ
た。ずきさんは前も来たけどかん
していらる。

5/24(水) さぶ木さんがまたきてくれた。土器
もきた。さぶ木さんがかかっていた。
5000年くらいの。カシゴキ。

5月24日(水)
今日縄文と、をさわった。め
ちやさいコー、おもしろい。

5/24 水
今日またさぶ木さんが来た。縄文
土器を見せてもらった。縄のまよ
うだけじゃなくて他のまよもある。シ
が分かった。

5/24 今日、3・4時間目に「
社会」をした。さぶ木さんが来てく
れて、土器のやげらを見た
りした。そしてヒモ一本だ
けでもさうかてできること
が分かった。私はさぶ木
と思った。

5/24(水) 今日、さぶ木さんが来た。
土器を見せてくれた。めら
うれしかった。かなりすごかった。
たぶん一度しかみれないと思っ
た。ずきさんは前も来たけどかん
していらる。

5/24(水) さぶ木さんがまたきてくれた。土器
もきた。さぶ木さんがかかっていた。
5000年くらいの。カシゴキ。

5/24 今日、さぶ木さんが来た。縄文
土器を見せてもらった。縄のまよ
うだけじゃなくて他のまよもある。シ
が分かった。

5/24 水
今日またさぶ木さんが来た。縄文
土器を見せてもらった。縄のまよ
うだけじゃなくて他のまよもある。シ
が分かった。

図4 一言ノート (児童作成：5月24日分)

鈴木：「今から5,000年ぐらい前のものなんだよ。」

児童：「…？5,000年前ってどれぐらい前？この間一人亡くならはったけど、きんさん・ぎんさんは100歳でしょ？…」

鈴木：「きんさん・ぎんさんのおばあちゃんのおばあちゃんの…って50回ぐらい言ってごらん。それぐらい昔の人たちが作って使ってたんだよ。」

児童：「ふーん。なんで壊れてないの？」

鈴木：「壊れていたのを、くっつけて直したんだよ。（“ひび”を指して）ほら、ここにくっつけた痕があるでしょ？」

児童：「誰がくっつけたの？」…。

我々の仕事は、発掘調査をし、土の中から出てきた遺物を調査・研究することであり、その中で分かったことを皆に知らせるために学校に来たんだということを、順に随時児童から発せられる質問に答えながら、ゆっくり説明していった。

児童：「これから、いつも来るの？」…。期待が溢れんばかりの眼差しである。

「(そうできるようになると良いんだけどね…)。」と思いながら、「今日だけだよ。」と答えた。少し寂しそうな表情を見せてくれたことが、とても印象的だった。

3年生社会科のカリキュラムにおいても、3学期に「むかしを訪ねる」という単元がある。「調べ学習」の総まとめ的な授業を行なうことがその主目的で、従来の授業では、教科書を見る限りでは、おじいちゃん・おばあちゃんに昔の話の聞き取りをしたり、古い写真と現在の状況を比べたりするようである。「本物に触る」ことを積極的に評価するのであれば、ここにも「文化財」が活用できる余地は充分にあるし、しかもそれは決して難しいことではないように思われる。この児童との対話は、そんなことを考えさせてくれた。

5. 授業研究会

その後、児童たちの下校時間に前後して、先生方の授業研究会が始まった。テーマは「今日の“研究授業”について」である。まず伊藤先生が、今回の

授業の構想等について説明し、授業内容の整理をした後、鈴木が自己紹介も兼ねて使用教材(文化財)の説明を補足した。その上で、先生方の感想等を含みつつ、授業のあり方等の検討を行なった。

全体的な授業の進め方・形態等について提示された意見は、以下の通りである。

A先生：「僕だったら、もっとたくさん子供たちに触らせるなあ。せっかく“本物”があるのに触らせないのは勿体無いし…。僕らでも触っていると“ワクワクドキドキ”があるし、それは子供たちも一緒でしょ？ノートにまとめる時間を削ってでも、触らせたいなあ。」

B先生：「“体験”させることは大事ですよ。僕だったらさらに、発掘調査に参加させたりできればもっと面白いと思いますけど…」

C先生：「外部講師(鈴木)の使い方が勿体無くないですか？今回は完全に“利用する”形をとっていますが、せっかく来て頂くならもっと話をしてもらった方が…」

伊藤先生：「今回の授業では、あくまで“子供からの問いかけ”を大事にしたかったんです。講師に話をしてもらうのもいいですが、そうすると子供達は“自分で考える”ことをしなくなるし、それではせっかくの“本物”も宝の持ち腐れですよ。勿体無いですよ。」

授業時の伊藤教諭の「これは何に使ったんでしょう？」という発問そして、「観察項目(大きさ・形・厚さ・模様など)」をはじめに提示したことについての意見は以下の通りである。

D先生：「私なら“どうやって作ったんでしょう？”って所に興味がいきますね。だからそういう発問をするかなあ。」

E先生：「最初に“何に使ったんでしょう？”という発問を教師がしてしまうと、児童の“発想”をつぶすことになりませんか？」

F先生：「観察項目を最初に提示してしまうのもどうかなあ。子供たちに自由に発想を…」

ここまでの話を受けて、校長先生から「あなただったら文化財をどんな授業の時にどんな風に使いますか？」という問題が提示された。

G先生：「国語ですね。“観察”したことを“言葉”

5/24 (水) 指導案

土器を教室の真ん中に置く。(鈴木)

これは粟津湖底遺跡から出てきた土器です。この前のスライドに写っていたものです。(いっしょに写っていたもの)
 見せよう(土器を見に来る前へ) "見せよう!"
 意見が出なくなったら、土器を真ん中に置いて、ちがいは何か。

何に使っていた土器だろうか 研究の方法は
 大きさ 形 観察!
 厚さ
 模様
 底(底面はどうか)
 その他(紐)

これは、みなさんのグループに2つずつ土器を置きます。
 大きくはない、かわてもいい。
 中にはもうスケッチ 大きさ ① cm
 形 ② 土器のどの部分(假想) 上下
 厚さ
 模様 ③
 底
 底面はどうか
 見せよう
 もとにもとめて。
 資料のいこころ、鈴木さんに解説してもらう。その後、質問する

校時

なぜ、もようがついているんだろう?

模様のつけ方を学習しよう。(鈴木説明)

より方に失敗してもいい。① ② ③ ④ ⑤ ⑥

この土器と同じ模様をつけよう。(米田)

これは鈴木さんの研究したことです。
 ①
 ②
 ③
 ④
 ⑤
 ⑥

何に使って模様をつけただろうか?

やっぱり道具を大切にしようとしたのではないかな?

では、なぜ見境に合せていたのかな?

6年生2組社会科(総合学習)学習指導案

2000.5.24 3校時
 6年2組教室 伊藤真治

文化財保護協会専門員 鈴木康二

1 単元名 粟津湖底遺跡とセタジミ

2 指導にあたって (ここには自分の問題意識を書く)

一般的に、子どもたちは、授業が嫌いである。しかし、だからといって授業をやめるとすると、やっぱり授業を受けに来ているのだと反論する。教師にとっての悩みは深刻である。この矛盾した子どもたちの要求を、学校では正しく解釈できない。ある人達は、点数や丸で教師の行為を権威づけようとする。そこには、基礎学力の訓練とテストやプリントの世界が広がっている。一方、別の人たちは、おもしろくない学校をレジャーランドのように作りかえる。そこには、教師の用意した遊びと管理の世界が広がっている。このようなアメとムチは、子どもたちの内面を貧しくし、教師の心をニヒリズムにかりたてる。そうして学校は、どんどん崩壊していくのである。

このアメとムチは、コインの表と裏の関係にある。基礎学力の訓練もレジャーランドで楽しませるのも、どちらも教材研究を欠くということでは共通している。そのため、教師が自ら教材について追求しないから、子どもたちはその安易さを見破り、授業中に沈黙やふざけるといった手段で抵抗を試みる。

現在6の2の子どもたちは、沈黙という手段を使っている。これは、教材に問いかけることが弱いから起こる。本物を見ても、すごいなあとかいえないのである。そこで、土器に話しかけることによって、学習をつくりだしていきたい。つまり土器についての研究をさせたいと思う。

これは、学びのおもしろさと厳しさを同時に経験させることである。本物の学びには、そこに追求のおもしろさと真実に対する厳格さが存在する。さらに体験も基礎学力も言葉もすべて本物の学びには要求される。そういう本格的な学びが経験できるように工夫していきたい。

ところで本格的な学びとは、自分の問いを自らの責任で解決することといえることができる。発掘された文化財のもつ魅力によって、問いを生み出し、また、教師や専門家の助言によって、自分の問いを解決し、それを他の友達と共有する。そういう学習が少しでもできるようになってほしいと思う。

3 単元構想 (自分の書きやすいように書く)

①粟津湖底遺跡って何だろう。

②白い貝殻を詳しく見てみよう。
 ・大きさはどうか。
 ・何という貝なんだろう。
 ・この貝は人間がどのように利用したのだろう。
 ・貝から何が発見できるか。

③貝を食べたのだろうが、どうやって食べたのだろうか。
 ・焼いたのか、煮たのか、生なのか

④出てきた道具と骨を見てみよう。
 ・何の道具か(石器)
 ・何の骨か
 ・どうして昔と大きさが違うのだろう

⑤いったい何を主食にしていたのか。
 ・資料を使って調べよう

⑥土器について研究しよう。
 ・どんな特徴があるか
 ・どんな使い方があったか
 ・模様はどのようにつけたのか実際に調べてみよう

⑦さらに自分の疑問を調べよう。
 ⑧現代のしじみを調べよう。
 ・収穫量の移り変わりはどうか
 ・料理にはどういったものがあるか
 ・どうしてしじみが減ってきたのか
 ・しじみとりを体験しよう

⑨しじみの未来は、どうなるだろう。

4 本時の目標と展開 (書きたいように書く)

本時の目標
 土器を見て、土器に話しかけ、不思議に思ったところを、比較や想像によって、自分の答えを見つけていく。

学習活動	指導上の留意点
1 教室に登場した土器を分析し、意見や疑問をいう。	・子どもたちは分析に慣れていないので、意見は出にくいと思う。そういうときは、色は、大きさは、何で作られていたのか、投げかける。 ・土鍋を横におき、比較することによって、その違いを発見させていくことも考えたい。
2 グループごとに土器を観察し、研究する。	・自分で問題をつくり、自分で答えさせる。 厚さはどうか、色は、模様はどうなっているか、のように。スケッチは大切なので、ていねいにさせる。
3 鈴木さんに当時の人の技術について話を聞く。	・大事なことは、メモをさせる。また、鈴木さんの話を聞いて、疑問を考えたり、質問したりする。

図5 指導案(伊藤教諭作成:上:筆者との打ち合わせ簿・下:授業研究会用資料)

で表現させることを考えます。“伝える・表現する”ことを練習することができるでしょう。また、今日みたいな授業を受けて、国語の時間に感想文を書かせてもいいですし。」

H先生：「算数ですかね。今ちょうど“体積”について学習している所なので(笑)。」

A先生：「ひたすら触らせて、児童との対話の中から課題を見つけてみたいですね。」

D先生：「“実物を見て感じたこと”を話し合わせてみたい。どんな発問があるのか興味がありますね。」

なおこの研究会において、平成14年度から正式に導入される、「総合的な学習」カリキュラムについての検討も促された。いくつかの意見が提示されたが、現時点ではまず学校全体の方針を検討・決定することが必要な状況のようであった。

またこれらの意見以外にも、当然のことながら、今回教材として用いた土器についての質問や、考古学全般に対する漠然とした質問もいくつか提示された。適宜質問に答えながら、考古学界の最近の動向や、埋文行政の現状等について説明しつつ、そしてさらに埋蔵文化財が学校教材としてさらに活用していただけるようお願いしつつ、研究会は終了した。

6. 成果と今後の課題—まとめ—

これまでの授業参加や、児童や教諭との対話を通じて、学校教材としての文化財活用については、本格的に取り組む必要がある時期に来ているのかもしれない、という印象を持った。児童達の文化財に対する興味の示し方は、「本物」を教材として活用することの意義を十分に感じさせてくれたし、この点については、先生方からも再三指摘された。それは、今回対象とした6年2組の子供達の反応だけではなく、他の6年生児童の土器や貝殻に対する興味の示し方や、他の学年(例えば3年生)の児童から筆者に向けられた発問の内容からも、十分に感じられた。

その一方で、より効率的な「活用」をするためには、以下のような課題を十分に検討していく必要があることを感じた。

①「話題提供(=授業の出発点)としての資料提示」は、教員との事前打ち合わせによって、様々な形

での対応は可能であろう。しかし、そこから児童の反応を見ながら、より柔軟な対応をするためには、どのような「教材」を用意しておくべきなのだろうか。当日、度々「〇〇も用意しておけば…」と感じたことは否めない。しかしその一方で、あまりたくさん「実物」を並べてしまうと「児童の目線」が落ち着かなくなってしまうであろう。現状では、児童の興味・関心の方向性は、事前に「予想」することまでしかできないという限界があり、担当教員との相談の上で、汎用性の高い形での用意をしておくのが妥当なのかもしれない。

②その単元で「児童に考えさせたいこと」を教員側はより明確にしたうえで、教員と我々との間で十分な事前打ち合わせをしておくべきであろう。なぜなら、授業中の児童からの質問に対して、適宜臨機応変に対応する必要があるからである。例えば教員側が「この後で考えさせよう」「次の時間で調べさせましょう」と考えて、単元構想をしていた点について、児童がこちらに質問を発した場合に、とっっても詳しく「一部の児童に答えてしまった」のでは、授業が成り立たなくなってしまう場合もあり得る。そういう事態に備えて、「教員が児童に考えさせたいこと」について、あらかじめ十分な打ち合わせを行ない、それをこちらも理解した上で、如何に適切に対応できるかが根本的な課題となる。

③①に関連して、単元(もしくは授業)の発端としての「話題提供として提示する」資料については、さらに色々な材料を埋文行政側でも用意しておく必要があるのかも知れない。ただし、その際には、こちらでもある程度、指導要領の内容を把握しつつ、教員と「どのように利用することが可能であるか？」等の点について、共同で教材としての研究を行なう必要がある。

また、先生方との研究会を通じて、今回のような授業参加型の文化財活用や講師派遣依頼は、今後ますます増えてくるのではないかという印象を持った。こういった形で対応することが、より適切・適当であるのかも含めて、こちら側の意見・考えもある程度はまとめておく必要があるのかもしれないと思う。埋文行政側でも前もって、何らかの準備は講じてお

くべきであろう。

おわりに

他府県の普及啓発事業等について、若干の聴き取り調査を行なったところ、本稿で紹介したようなTT形式での学校教育現場(授業)参加を、恒常的かつ積極的に実施している所は、残念ながら現時点では少ない。しかしながら、一方でそういう方向に向けて検討をはじめている機関も、決して少なくはないというのが現状のようである。

冒頭でも述べたが、一般に「普及啓発事業」といえば、展示・各種体験・リーフレット等刊行物の作成などが昨今の主流である。それら一つ一つは、役割も異なるし充分大切なものであり、従来通りあるいは今まで以上に実施していくべきものであることは言うまでもない。しかし一方で、今以上に文化財特に「埋蔵文化財」について、一般の方々に認識を深めてもらうために、さらに様々な手段を工夫していくべきではないかと考える。

筆者が時々行く、とある食堂の店主(今年の2月に亡くなった。冥福を祈りたい。)が、生前こんなことを言っていた。

「鈴木さんと知り合ってから、新聞とかテレビで『発掘』とか『遺跡』とかって文字を見ると、ついつい真剣に見てしまうよ(笑)。」

筆者自身は、「普及啓発」の根幹は、この発言の中にあるような気がしている。ヒトが「自分」にとって「身近なもの」に、興味を抱く事に何ら不思議はない。今まで単に「他人事」だったのが、些細なきっかけから「身近なもの」に変わる。周りが騒がずとも、「身近なもの」には自然に自らから注意を向けるようになるのではなからうか。

そう考えた時、「普及啓発」は「埋蔵文化財」を「他人事から身近なもの」に変えるための、「きっかけ作り」であれば充分なであろうと思う。興味を引くために、わざわざお金をかけて「盛大な、お祭り」をする必要はない。あるいは敢えて「難しいこと、珍しいこと」を強調する必要もない。

「普通」でいいのだと思う。「日常」で充分なのだと思う。「日常・普通」であればこそ、「身近なもの」として捉え易い状況は整うであろう。そ

して、そのなかで「きっかけ」を見つけて「現在と過去という時間差を越えた『身近なもの』として見せる」ために、どうすれば良いのか、どうすべきなのかを「常に考え」、かつ相手の立場にたって「提示しようとする気持ち」が大切なのではないだろうか。

今後、今回報告したような機会がある場合には、今回のことを踏まえて、より良い形での文化財活用を自分なりに考えてみたいと思う。また、その一方で自分にとっての「歴史」、自分にとっての「埋蔵文化財」とは、一体如何なるものであるのかを考えつつつけていきたいと思う。

「『歴史』について考える」ということは、現在の自分自身にとって、自らの「存在意義」を証明することであり、これから進むべき「道」を探すことにほかならない。

(2000.12.28脱稿)

謝辞

今回の実践は、大津市立富士見小学校の伊藤真治教諭をはじめとする諸先生方や、6年2組の児童をはじめとする多くの子供たちの協力があったからこそのものである。この場を借りて謝意を表したい。

(すずき こうじ：調査整理課主任技師)

註

- (1) ヒトによっては考古学関係の各種論文や書籍も含めるかもしれない。しかし、本稿ではいわゆる業界関係者向けに主眼が置かれているものは、含めずに考えておきたい。
- (2) 造酒豊編『地域文化財活用開発事業報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000、近藤滋編『地域文化財活用開発事業報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999
- (3) いわゆる「TT(チームティーチング)形式」のこと。
- (4) 一言ノート(図2・4参照)：「一言ノート」とは、その日の「帰りのホームルーム」の時間に、その日一日印象に残ったことを一言で書き記すノートのこと。

追記

2001年2月27日に富士見小6年2組の卒業記念感謝祭に招待された折、複数の児童が「あの貝殻、机の上に飾ってあるよ!」「宝物になってるよ!ありがとう!」と言ってくれた。「貝殻」の有効活用事例のひとつとしても、本報告例を評価しておきたい。

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思ひます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668